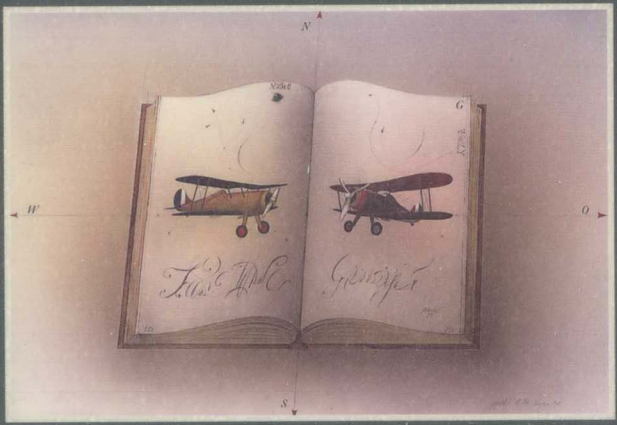
今日も、本さがし

高橋英夫



新潮社

今日も、本さがし

高橋英夫

新潮社

今日も、本さがし

一九九六年二月一五日発行
一九九六年七月二〇日五刷

著　者　高橋英夫（たかはしひでお）
発行者　佐藤隆信
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話（編集部）03―三二六六―五四一一
（読者係）03―三二六六―五一一一
振替　〇〇一四〇―五―八〇八
印刷　錦明印刷株式会社
製本　大口製本印刷株式会社
価格はカバーに表示してあります

© Hideo Takahashi
1996, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
ISBN4-10-312007-X C0095

今日も、本さがし◇目次

Ⅰ　本の悩み

絵はがき　11
本さがし　15
ブルーノ・タウト展　20
真夏の京都　25
音楽のある日々　30
また、本さがし　34
先人追懐　39
隠遁生活　44
小林秀雄のレコード　49
玩語喪志　54
引用の面白さ　59

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

本の悩み　64
奥の院　69

Ⅱ　私の書斎術

私の書斎術　75
本の大移動　77
私の本整理術　82
私の文章術　86
書評八百冊……　90
書評家という存在　93
文学の筆写　97
「こと」断ち　99
編集作業というもの　104

新幹線で読む古典　108
売る本　売らない本　112
今日も、本さがし　116

Ⅲ　記憶と影

二つの後ろ影に　121
追想竹山道雄先生　125
アニミズムとしての批評　128
尾崎さんの片言隻語　133
「行きて帰る」さすらいの人　136
父・露伴の娘　141
見出された「師弟の位相」　146

Ⅳ　美神の魔

モーツァルト　153
最後のオペラ・セリア　157
音楽が音楽に袂別する　160
夢のノート「シューベルト」　165
美神の魔　168
美術館の「真昼」　172
夏の美術館　176

Ⅴ　漂う歳月

田園都市のまぼろし　183
奥付のうしろのページ　188
言葉の戦中戦後　193

面接の一撃　197
文学と通過儀礼　200
ドイツ語三歳の春　203
私にとっての大学　207
相寄り相集う言葉のむれ　211
※
二見浦　215
京都にて　219
方言と俗語　223
震度1の場所から　227
東京駅、そして倚松庵　230
後記　234
初出一覧

今日も、本さがし

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

I

本の悩み

絵はがき

古社寺や史跡を訪れたり、観光地に行ったりしたとき、忘れなければ絵はがきを買う。普通の店に並んでいる名所絵はがきはたいてい八枚、十枚ぐらいで一組になっていて、嵩張りもせず厚くもないのだが、それでも少しずつ溜まってくると場所をとるようになった。

以前は絵はがきなんかには全く関心をもっていなかった。名建築でもみごとな風景でも、その場に行って自分の眼でしっかり見ることが肝心である、という考えが根強くあったからだろう。そのうえ名所絵はがきというのはいかにも通俗的にキレイに写ったものばかりで、型にはまっているのが嫌だということもあった。写っているお寺や風景はすばらしくても、絵はがきになるとどこか「キッチュ」なのだ。ドイツ語「キッチュ」は「趣味のよくないまがいもの」の意味である。

もっとも美術展の会場に並んでいる出品作品の絵はがきは別で、これは以前から抵抗なしに買

うことができた。なぜかこちらは、あまり「キッチュ」の感じがしなかった。そうは言っても、三十年前を思い出すと、展覧会の図録も簡素でそんなに重たくなかったし、絵はがきも本当に気に入ったものだけ三枚、四枚と求めるというのが通例だった。今では図録もむやみに重量がある。絵はがきも買いすぎの気味がある。

俗っぽくて嫌だった名所絵はがきを買うようになったのは、やはり役に立ったからである。芭蕉について評論を書くために、芭蕉ゆかりの地を東北、北陸、関西といくつかまわって見るようになったのは八年ぐらい前からだろうか。東北だけでも白河の関、平泉、立石寺、象潟、吹浦その他、何度も行ったが、実地に見たことが大きな力になるのは勿論だが、自分で撮ってきた写真も役に立った。ところが、どういうわけか「肝心のそこがどうなっていたか確かめたい」というとき、名所絵はがきの中にそれを見つけて、「あった」という経験をすることが多かった。

那谷寺や永平寺でも、高野山でもそういうことになった。自分で撮った写真はその時の気分を思い出すのには役立っても、どこか客観性に欠けるというわけだろうか。この結果、考えを変えて、絵はがきも敬遠しないようになった。そればかりか、これはよさそうだ、というものは二部求める。一つは自分用、もう一つは実際にはがきとして使うために、である。

古い話だが、堀辰雄に『絵はがき』という小品集があった。晩年の堀辰雄は病床にあって出歩けなかったし、執筆も思うにまかせなかったが、以前にあちこちに書いた小品や翻訳を集めて『絵はがき』という本を作った。そのあとがきの中で堀辰雄は自分が病を養っていることを述べ、

そんな自分に代って以前友だちに出した絵はがきを集めたつもりでこの本を出すのだ、と言っていた。一枚の小さな紙にもさまざまなメッセージが託されていると思ったものである。

通信の手段としてみれば、絵はがきに長い内容を盛りこむわけにはいかない。長くなりそうなときには封書である。ところでこのごろ、友人知人から絵はがきを受け取る楽しみが増してきたと感ずる。気のせいだろうか、十年前五年前とくらべても、絵はがきを出したり貰ったりする機会は多くなっているようだ。

友人のフランス文学者清水徹さんからの通信は、ほとんど常にと言っていいくらい絵はがきである。それが五十円切手を貼られて届くのではなく、八十円貼った白い洋封筒に入って来る。お互いに、出した著書や論文の抜き刷りを送りあう仲であるが、筆まめな清水さんはちゃんと感想を送ってくれるのだ。有難い。しかも何とこまやかに、手がかかっているのだろう。そう言うまえに、いつもイキだなあと思う。

別に信書の秘密を保つため絵はがきを封筒に入れるのではあるまい。彼が送ってくれるのは、本の読後感のほかにそういう心づかいなのだろう。その全体がメッセージなのだと思いながら受け取るのである。

絵はがきのいい所は、短くてすむということである。普通のはがきの半分で済ませることができる。仏像や名画で眼を娯しませるというプラス・アルファもついている。清水さんは住所と宛

名を記すスペースも使って書いてくるので、普通の郵便はがきと大体同じ分量になるが、何しろ気がきいている。

その彼は昨年パリに滞在していたが、夏のバカンスのあいだブルターニュのロクロナン村という所に行き、そこから地元の聖ロナン教会の絵はがきを送ってきた。やっぱり封筒に入っていた。そこは人口八百の小村で、教会は十五世紀建立らしい。その風景を眺めながら、あれこれと想像をめぐらせるのが楽しかった。

むかしの文人は自筆の画を絵はがきにして出していた。漱石が橋口五葉や寺田寅彦らに宛てたそういう絵はがきが思いうかぶ。近年では、大岡信さんが書いていたことだが、瀧口修造は親しい相手によく自作の画を速達で送ってきたという。サイズは分らないが、これは速達絵はがきと言うべきだ。瀧口さんの場合、前衛性と親密な交友空間とが結びついていたのが面白い。

というわけで私も、このごろはよく絵はがきを使う。ただし五十円切手を貼って出すだけだ。三年ぐらい前、早世した画家有元利夫の展覧会に行っておおいに気に入ったので、たくさん絵はがきを買った。当分なくならないだろうと思っていたが、気がつくともう一枚も残っていない。いつかある人から同じ「有元利夫」が私宛てに届いて、ああこの人も、と思ったことがあった。昨年暮、大丸ミュージアムでハインリヒ・フォーゲラーの白樺の絵はがきを何枚も買って愛用してきた。いま見てみると、自分用のを除いて、これももう二枚しか残っていない。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.